

『全国木簡出土遺跡・報告書綜覧Ⅱ』の刊行

現在のところ、日本全国から389,357点の木簡の出土が報告されています。今年2月に刊行した、『全国木簡出土遺跡・報告書綜覧Ⅱ』(埋蔵文化財ニュース154号)にちなんで、10年ぶりに集計されました。1冊目の『綜覧』(2004年2月)には、311,184点の情報を収めていますから、この10年で78,000点余りの木簡が出土し、あるいは公表されたことになります。

木簡の出土点数の増加に対応する形で、木簡が出土した遺跡の数も増えています。この10年で、遺跡の数は975から1,378へと、およそ1.4倍に増加しました。その多くは、中世、近世、あるいは近代という、新しい時代の遺跡から出土しています。古代には限らない、木簡=「文字のある木製品」という広い定義が、定着しつつあるといえるのかもしれません。

『綜覧Ⅱ』は、全国の発掘調査機関、大学等の研究機関、公立図書館等の公的機関のほか、木簡を調査されている全国の調査担当者の方や研究者等1,000名余りに配布されました。現在、公開中のデータベース更新にむけた作業をおこなっています。

先日、本書を手にしたある図書館司書の方から、「似たようなタイトルが多く、書架に並んでいても探しにくい(報告書を)検索するレファレンスツールが充実」したという、ご意見をいただきました。木簡のナショナルセンターとしての奈良文化財研究所は、調査・研究の世界のみならず、社会教育の現場からも期待されているようです。

(都城発掘調査部 山本 崇)



10年ぶりに刊行した綜覧

高松塚古墳 墳丘断面の展示

飛鳥資料館の新たな常設展示として、高松塚古墳の墳丘断面を公開しました。実際の土層の表面に布を接着して、薄く剥ぎ取って標本としたものです。

高松塚古墳の壁画を生物被害等から守るため、2006~07年に石室解体事業が実施されました。墳丘中心部を発掘調査しながら掘り下げて石室を露出させる作業は、奈良文化財研究所が中心となっておこないました。その過程では図面や写真等の記録とともに、このような実物資料も保存したのです。

高松塚古墳は上段直径17.7m、下段直径23mを測る二段築成の円墳です。墳丘は、石室を構築しながら土まんじゅう状に盛り上げる下位版築と、遺骸を納めて石室を閉塞した後にさらに盛り上げる上位版築の大きく二段階にわけて構築しています。版築とは土をつき固めて3~5cm程の層を積み重ねていく土木工法で、密度の高い丈夫な盛土をつくることができます。

ここに展示したのは、下位版築の東西断面から得た標本です。版築は90層程あり、粘土質の赤い層と砂質の淡色の層を交互に積み重ねていること、特に強度が高い最下部の版築は土の色も異なること、凝灰岩の粉末が混じっていること等がわかります。また、大地震で墳丘に生じた亀裂が版築層を貫いて縦方向のシワのようにみえています。

今回展示した墳丘断面は、終末期古墳の精緻な版築の例として学術的にも貴重です。また、高松塚古墳の石室周辺の版築層は解体にともないすべて掘削せざるをえなかったので、限られたものながら、高松塚古墳中心部の墳丘構造そのものを後世に伝える希有な資料でもあります。

(飛鳥資料館 石橋 茂登)



展示の様子。土層は実物、中心の石室は模造。